



Data

監督・脚本: ロイ・アンダーソン
 撮影: ゲルゲイ・パロス
 出演: マッティン・サーネル/タテ
 イーナ・デローナイ/アン
 デシュ・ヘルストルム/ヤー
 ン・エイェ・ファルリング/
 ベングト・バルギウス/トー
 レ・フリーゲル
 ナレーター: イェシカ・ロウトハ
 ンデル

👁️👁️ みどころ

“映像の魔術師”と呼ばれる“スウェーデンの巨匠”ロイ・アンダーソンが、金獅子賞を受賞した前作『さよなら、人類』に続いて、本作で銀獅子賞を！

1枚の絵画から紡がれる物語は、シェヘラザードが王様に語って聞かせた『千夜一夜物語』ほどドラマティックでもなければ、面白くもない。セリフを極力省いた、悩み多き男女の暗〜い物語だが、それでもどこかに希望が……。それがいい！

『ある画家の数奇な運命』（18年）（『シネマ47』169頁）では、東ドイツ出身の画家クルト・バーナートの「フォト・ペインティング」を知ったが、本作ではシャガールの『街の上で』を始めとする数々の名画にインスパイアされた「千夜一夜物語」をじっくり味わいたい。

ちなみに、地上を浮遊する恋人たちが眼下に見ている町はどこ？その崩壊ぶりは？その原因は？1枚1枚の絵画に込められた思いを感じとりながら、英題『About Endlessness』と邦題『ホモ・サピエンスの涙』の意味をしっかりと考えたい。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■ “映像の魔術師”の面目躍如！この巨匠に再度注目！■□■

本作はロイ・アンダーソン監督の長編第6作目。私が“スウェーデンの巨匠”と呼ばれている同監督の素晴らしさを知ったのは、『さよなら、人類』（14年）（『シネマ36』262頁）を観た時。その前に『愛おしき隣人』（07年）（『シネマ19』339頁）を観た時は“それなりのもの”という“納得感”だったが、固定カメラ、1シーン1カットの撮影で計39シーンを並べた『さよなら、人類』は、「映画は動く絵画」の思想を实践したものとして、見れば見るほど深い味わいが生まれる作品だった。

世間はそんな“スウェーデンの巨匠”ロイ・アンダーソン監督を“映像の魔術師”と呼んでいるのだが、同監督は、第71回ヴェネチア国際映画祭で金獅子賞を受賞した『さよなら、人類』に続く、5年ぶりの最新作たる本作で、第76回ヴェネチア国際映画祭の銀獅子賞（最優秀監督賞）を受賞。“映像の魔術師”ぶりを発揮しているので、再度それに注目！

■□■この名画はシャガール！その撮影は？その狙いは？■□■

私は2017年4月18日にはじめて、徳島県鳴門市にある大塚国際美術館を見学したが、その巨大さと4時間ではとても鑑賞しきれない膨大な作品群に驚かされた。そこでは、世界中の有名な画家の作品が陶板で再現されていたから、シャガールのコーナーもじっくり鑑賞できた。妻のベラを一途に敬愛し、ベラへの愛や結婚をテーマとした作品を数多く残しているため、「愛の画家」とも呼ばれている彼の代表作の1つが、『街の上で』だ。英題を『About Endlessness』、邦題を『ホモ・サピエンスの涙』とした本作のチラシには、シャガールの『街の上で』の名画が大きく載せられている。するとスクリーン上でも、その絵をそのまま見せるの？そう思っていると、イヤイヤ……。ロイ・アンダーソン監督が、この名画からインスパイアされた『無限について』、もしくは『ホモ・サピエン（全人類）の涙』について、本作で見せる“映像の魔術師”ぶりとは？

『街の上で』（1918年・油彩）は、故郷・ヴィテブスクの上空で抱き合いながら浮遊するシャガール自身とその妻ベラの姿が描かれているそうだが、ロイ・アンダーソン監督は、このシークエンスのために膨大な費用をかけてセットを組み、1ヶ月かかりで撮影したそう。パンフレットにある①「Studio 24 ロイ・アンダーソン監督の制作現場」（11頁）を読み、②「DIRECTOR'S INTERVIEW」（18頁～19頁）を読み、③「PRODUCER'S INTERVIEW」（20頁～21頁）を読むと、彼らの目の下にある都市全体は巨大なセットで、その街の模型を建てるのに1ヶ月かかったそうだから、いかに苦労したかがよくわかる。しかして、その狙いは？タイトルとの関連は？

それを読み解き解説するためにはもちろん感性が重要だが、それだけではなく、シャガールの『街の上で』についての勉強と知識が必要だ。

■□■千夜一夜物語を語るシェヘラザードは？そのセリフは？■□■

私は1974年4月に弁護士登録をした直後、クラシック好きの友人と意気投合し、オーディオとレコードに凝ったが、その時大好きになったのがリムスキー・コルサコフ作曲の交響詩『シェヘラザード』。これは、『千夜一夜物語』をテーマにしたものだが、それを語る女性がシェヘラザードだ。シェヘラザードはシャフリヤール王のために、波乱万丈の面白い物語を夜毎繰り広げたわけだが、さて、ロイ・アンダーソン監督がインスパイアされた数十枚の絵画から構成された本作のシェヘラザード役は誰が？そして如何なるセリフを？

本作のチラシには、シャガールの『街の上で』の他、数枚の絵画が載せられている。そ

これらの絵からインスパイアされた物語を、退屈させない面白い物語として見せるためには、『千夜一夜物語』を語って聞かせたシェヘラザードのような“上手な語り手”が必要！もちろん、そんなアプローチもありうるが、ロイ・アンダーソン監督は真逆のアプローチをとっている。すなわち、本作でシェヘラザード役を務める女性ナレーター最初のセリフは“男の人を見た。おいしい夕食で妻を驚かそうとしていた”、“男の人を見た。ぼんやり別のことを考えていた”、“女の人を見た。広報の責任者で、恥じるということがまるで分からない”等々のシンプルなものになっている。カメラがとらえる登場人物のセリフも少ないうえ、その動きも最小限だ。デヴィッド・フィンチャー監督の、早口で喋りまくる登場人物たちの膨大なセリフ量に驚かされた『ソーシャル・ネットワーク』（10年）（『シネマ26』18頁）とは正反対の本作のセリフの少なさは、きっと映画史上トップ10に入るものだろう。

ちなみに、ジャガールの『街の上で』について女性ナレーターが語るセリフは、“恋人たちを見た。愛し合う2人は空を漂っていた。かつての麗しの都 — 今や廃墟と化した街の上を”というだけだ。たったこれだけのために巨大なセットを組み、膨大な撮影時間をとったのだから、映画作りは大変だ。

■□■不器用で悩み多き男女たちばかり！それでも希望が！■□■

本作でシェヘラザード(?)が語る『千夜一夜物語』(?)の登場人物は、すべて不器用で悩み多き男女だ。とりわけ、前半に登場する、信仰を失ってしまった牧師はその後別の物語にも登場するので、今風の言い方をすれば、彼の悩みにしっかり寄り添いたい。また、導入部で食料品が詰まった袋を抱えて登場した、中年男は「先週、何年かぶりに再会したスヴァルケルに声をかけたが、無視された」という学生時代の友人とのエピソードを語るが、ラスト直前に再び登場し、再び学生時代の友人について話し出し、「また金曜日出くわした。今度も無視された、あいつは今や博士だ。私よりすごい。あんな負け犬が博士だとは、」と旧友とのエピソード“その2”を語るの、その悲哀をじっくり味わいたい。

その他、本作は『千夜一夜物語』のように、千日間も語り続けられるわけではなく、シェヘラザード(?)が物語る男女は約20名。しかし、そのそれぞれが一枚の絵のイメージで構成されているのはもちろん、極めて少ない語りとセリフの中で、彼ら彼女らの悩みがしっかり浮かび上がってくる。そこで本作が素晴らしいのは、それが絶望的なものではなく、どこかにユーモアがあり、希望らしきものが感じられることだ。一枚の名画の前に立って鑑賞するだけではなかなかそこまで思いを致すことはできないが、本作を観ているとそれが可能だから、本作は素晴らしい。

■□■ドイツの「新即物主義」とは？それを代表する画家は？■□■

10月に観た『ある画家の数奇な運命』（18年）（『シネマ47』169頁）は、数奇な運命の中で、最終的に「フォト・ペインティング」の手法を完成させた東ドイツ生まれの画家クルト・バーナートの物語だった。同作では、冒頭に示されたナチスドイツが193

7年にドレスデンで開催した「頽廃芸術展」の姿がショックだった。ここでは、20世紀初頭以来のモダンアート（印象主義、表現主義、キュビズム、抽象芸術、シュールレアリスム等）を、難解であるばかりか、見る者を不快にし、健全な国民文化の創生にとって有害であるとしていたから、ロシア出身のユダヤ系画家・シャガールの『街の上で』のような幻想的な絵は、その代表作だろう。それに対して、ロイ・アンダーソン監督のインタビューによれば、同監督は、その力強さゆえに新即物主義のアーティストたちに興味を持っており、本作に登場させていないものの、オットー・ディックスの「ジャーナリスト、シルヴィア・フォン・ハルデンの肖像」（1926/ミクストメディア、油彩・テンペラ）が大好きらしい。

パンフレットにある榎木野衣（美術批評家）のCRITIQUE 1「人類にとっての最後の希望」によると、第一次世界大戦後に現れた新即物主義は、同じ反抽象主義的な姿勢は取っても、リアリズムとは根本から異なるらしい。何がどう違うのか？そして、新即物主義が写真と相性が良いのはなぜか？等については、それをじっくり読んで勉強する必要があるが、ハッキリ言って私にはよくわからない。

ちなみに、本作にはファシズムを風刺したクルイニクスイの「The end」（1947-48/油彩）という絵が登場するが、これは私がはじめて見るもの。ヒトラーの最後は、オリヴァー・ヒルシュビーゲル監督の『ヒトラー～最期の12日間～』（04年）（『シネマ8』292頁）等で再三描かれているが、史実に即した（？）そんな映画で見る姿と、それを風刺した絵画で見るその姿とは大違いだ。この絵が登場するのはナレーターが“男の人を見た、世界征服の野望が、砕け散るのを悟った男だ”と語る物語。ロイ・アンダーソン監督がこの絵からインスパイアされた物語は、「散乱した部屋で“終わり”を感じる、3人の軍人。「勝利万歳（ジーク・ハイル）」。顔面蒼白のヒトラーが部屋に入ってくる。爆発音が絶え間なく鳴り響き、天井からは砂埃が落ちてくる。」というものだが、さて・・・。

■□■メインテーマは人間の脆さ！さまざまな絶望と希望が！■□■

トランプ大統領の登場によって、あらゆる意味での「分断が拡大した」と一般的に言われているが、私の考えでは、コトはそれほど単純ではない。しかして、ロイ・アンダーソン監督によれば、英題を『About Endlessness』、邦題を『ホモ・サピエンスの涙』とした本作のメインテーマは明確。それはズバリ“人間の脆さ”だ。しかし、“人間の脆さ”をテーマにすることは、イコール“脆い人間”をそのままスクリーン上に登場させ、描くことではない。本作前半に登場する「神を見失ってしまう牧師」はその典型だが、悪夢にうなされる彼は、もはや絶望的・・・？いやいや、必ずしもそうではないはず。それがロイ・アンダーソン監督の言い分。そのことは、監督インタビューで彼が「脆さを見せる何かを創作することは、希望のある行為だと思っています」、「なぜなら、存在の脆さに自覚的であれば、自分の持つものに対して丁寧でいられるからです」と語る言葉を聞けば理解できる。

「人生良いこともあれば悪いこともある」、「苦あれば楽あり」、「人生は糾える縄の如し」。これらは中国映画『活きる（活着）』（94年）（『シネマ5』111頁）のテーマになっていたし、全50作も続いた日本の歴史的遺産ともいえる『寅さんシリーズ』の主人公・フーテンの寅さんこと車寅次郎の人生訓でもある。2020年5月現在、地球上に約77億人も生息しているホモ・サピエンス（人類）は、たしかに脆い存在。しかし、人類がその脆さを認めさえすれば、そこから絶望ではなく希望も生まれてくる！？それを本作から感じ取ることができればロイ・アンダーソン監督は喜んでくれるはずだ。そうすると、邦題の『ホモ・サピエンスの涙』も決して「悲しいだけの涙」ではないことになるはずだが・・・。

2020（令和2）年12月2日記